

三 大正文学における生田春月

武田 信明

(一) 黄金期の文学

生田春月はもはや、文学史という記憶の場から消え去ってしまったかのように見受けられる。しかしながら、かつて生田春月は同時代の文学者のなかでも、その輝きにおいて群をぬく存在であったことは確かである。しかも生田春月が生きた時代は、「文学」が最も充実し最も影響力を持った黄金期であったのである。つまり文学史上の生田春月の意味を正確に測定するためには、彼が生きた「大正」という時代の文学状況を理解する必要があると言えるだろう。やや迂遠うゑんではあるが、簡単に当時の文学状況を概説することから始めてみよう。

周知のように「小説」や「新体詩」といった新しいジャンルは、明治の西洋化の流れのなかで輸入されたものである。明治期において、それまでの文学とは全く相貌そうぼうを異にする「近代文学」が確立したというのは常識である。しかし、近代文学が豊かな結実を見せたのは、四十五年という長大な期間のほぼ終わり近くである明治三十年代以降の事である。たとえば、

島崎藤村・田山花袋らで有名な自然主義文学であれ、夏目漱石の作家活動の開始であれ、それらはすべて明治三十年代から四十年代にかけての出来事である。つまり、明治という期間を通じて定着していった新しい文学は、その末期において、ようやく量としての文学者と、多様な文学世界の展開を可能にしたのである。その隆盛は続く大正期に至って完成される。その特質を列挙するなら以下の三点に要約することができるだろう。

まず第一に、文芸雑誌数の増加である。『新潮』、『文藝春秋』など現代も発行されている主要文芸雑誌をはじめ、大正期は実に多くの文芸雑誌が刊行された時代である。無論それは、単に雑誌数の増加だけではなく読者数の増大をも示しているのである。それと関連して第二の特質が指摘できる。その読者の中から自らも書くことを志望する作家予備軍が大量に輩出してきたことである。そして彼らは文芸雑誌への投稿によって作家としての道を模索していたことが共通点である。つまりこの時期、文芸メディアの全国展開に伴って日本の各地方、各都市で大量の作家志望の若者達が夢を追いかけていたのである。第三は、文学そのものの多様化である。それはこれまで漠然と「小説」と呼ばれていた分野のなかから大衆



『文芸春秋』第2年第5号(大正13年、春陽堂)。春月の「清閑雑記」が掲載されている。

小説・探偵小説・少年小説・少女小説といった独自のジャンルが分化し成立していったことから明らかであろう。これに加うるに海外の文学作品が多量に翻訳され始めたのが大正期であったことを考えあわせるなら、その多様さはさらなる広がりのもとで理解できるだろう。そして逆に言えば大正期の作家達は、単に小説を書くだけの存在としてではなく、童話を書き、芸術に關しての随筆をも書くといった多様な才能を要求されたのである。

以上のように大正期の文学状況を概括してきたのだが、その根底にあるのは文学を愛好する読者層の厚さであり、その需要に応じた出版業界の拡大であることが分かるだろう。極端に言えば、この時期誰もが文学に關心を示し、誰もが作家になるために若きエネルギーを費やしていたのだ。そしてその一人が生田春月である。いや正確に言うなら、生田春月ほど大正期の文学状況を体現している文学者は少ない。以下に記すように、彼の文学的足跡は、大正期の作家の典型であるだけでなく、まさに黄金期の文学状況の核心に位置していたとも言えるからである。

(二) 投稿と翻訳をめぐる状況

佐々井秀雄『評伝 生田春月の軌跡』に収められた年譜によれば、春月が文芸雑誌への投稿を始めたのは明治三十八年（一九〇五）、満十三歳の時であったとされる。彼はその後も

雑誌への投稿を続け、明治四十年には『文章世界』で毎月のように入選を果たすまでに至る。春月は翌年上京し生田長江いくたちやうけいに私淑するようになるのであるが、彼に上京して文学者となることを決意させたのは、投稿作品が入賞し続けたという自信である。同年春月に遅れる形で生田長江宅を訪れた佐藤春夫さとうはるおは、当時間を回想した「青春期の自画像」（昭和二十一年〓一九四六）というエッセイの中で、春月との出会いを以下のように記している。

この長い顎の青白い若者が、文章世界の投書家中、中村泣花（武羅夫）、加藤紅袖（武雄）などにつづいて、秦菱歌（豊吉）などととも第二級の選手として自分もその名をおぼえている生田清平の春月であった。

つまり佐藤春夫は春月と初対面であったのだが、その名前は投稿欄でよく承知していたのである。それだけではない、ここに挙げられた中村武羅夫なかむらぶらふ、加藤武雄、秦豊吉はたよきちといった入賞常連者達は、春月や佐藤春夫同様、後に大正文壇で作家や編集者として活躍することになった文学者達であり、さらに言えば春月の人生にも関与した人物なのである。彼らはそれぞれの郷里で投稿活動を続けながら、投稿欄を通じて互いの名と力量を認知していた。その後彼らはそろって上京し、東京で文学志望の青年として出会い、さらには同じ時期の投稿者という連帯によって東京でネットワークを構築していったのである。ここで理解しておかなければならないのは、上京して文学者になることが出来た彼らは、膨大な投稿者のなかのほんの一握りのエリートであるという点である。当時いかに多くの若者が投稿し、いかに多くの若

者が入選さえ果たさず作家としての道を諦めていったことであろうか。それらの中で春月や佐藤春夫は、その文学的素質が認められた稀有な存在であったことは知っておく必要があるだろう。

『文章世界』の投稿時代、春月は選者の一人であった田山花袋から、将来文学者を志望するなら語学の素養を身につけておいた方がよいと助言を受けたとされる。しかも彼が私淑した生田長江は当時の日本を代表する翻訳者でもあった。そのような影響下で春月は二十歳過ぎから独学でドイツ語の勉強を始める。彼が後に文学者として生活を営むにあたって決定的な役割を果たしたのは、この外国語の素養である。それは、まず第一に、彼が最新の外国文学理論を獲得することを可能にしたという文学的側面と、第二に不安定な詩人の収入とは別に翻訳による安定した収入をもたらしたという生活的側面の双方において意味をもった。そしてここにおいても春月と当時の文学的状況との深い関連を指摘できるのである。端的に言うなら、それは春月と新潮社との関係である。

明治期において小さな雑誌社に過ぎなかった新潮社は、明治末期から大正期の文学流行



大正12年落成の新潮社社屋。
（『新潮社七十年』より）

の時流に乗って会社規模を大きくしていった。雑誌『新潮』の発行所から文学系出版社の最大手へとの上昇がっていったと考えていただければよい。その新潮社の発展の一契機となったのが、大正三年（一九一四）から開始された新潮文庫の刊行である。この新潮文庫と、これも同年に刊行され始めたアカギ文庫との二つの文庫が、日本の文庫本の起源に位置する。そして新潮文庫は刊行当初、海外文学の完全翻訳を売りとしていたのだが、生田春月はその翻訳家の一人として抜擢はってきされたのである。『新潮社八十年図書総目録』（昭和五十一年）によれば、トルストイの『人生論』を嚆矢こうしとする新潮文庫の初期刊行本のリストのなかにツルゲーネフ『はつ恋』やゴーリキー『強き恋』など生田春月訳の書物を幾つも発見することができるのである。もちろん翻訳家生田春月の名を不動のものとしたのはハイネの翻訳作業に他ならないのだが、重要なことは、大正六年の『靈魂の秋』による詩人春月誕生以前に、彼が翻訳家として文学活動を開始していた事実であり、彼の翻訳家としての業績は忘れ去られがちではあるものの、詩人としての業績に勝るとも劣らないという点である。偶然とはいえ、翻訳を主眼とした新潮文庫の創刊時期と春月の翻訳家としての出発時期は一致したのであり、それが彼



ツルゲーネフ著、生田春月訳『散文詩』（新潮社、大正6年刊）

を文学者として世に出すきっかけとなったのである。さらに言うなら、それを可能にしたのが、師であった生田長江の有していた新潮社との密接な関係であり、彼の投稿仲間であった中村武羅夫や加藤武雄が『新潮』編集部に勤務していたという偶然であったことも忘れてはならない。

(三) 春月の意味

こうして大正六年に春月の第一詩集『靈魂の秋』、翌年には第二詩集『感傷の春』が、いずれも新潮社より刊行される。詩人生田春月の誕生である。しかしながら、彼の詩作品は分裂した評価で受け入れられた。ひとつは春月の詩が感傷性に満ち満ちた通俗なものであるという詩壇からの厳しい評価であり、にもかかわらず詩集としては爆発的な売り上げを記録したという読者の評価である。これらはいずれも春月の詩の本質を指摘している。つまり海外の高踏こうたつ的な文学論の紹介者でもあった春月にしては、彼の詩作品は通俗性をまぬがれないのであり、しかし、それゆえに読者とりわけ若い世代の読者には愛唱すべき詩作品として絶大な支持を得たのである。



『草上静思』（交蘭社、大正15年刊）

いずれにせよ二冊の詩集の刊行によって文学者としての地位を確実にした春月は、以降黄金期の大正文学のなかで旺盛な執筆活動に入る。それはハイネ全集の刊行などの翻訳、いくつかの詩集の刊行、『山家文学論集』に代表される評論集の刊行にとどまらず、多くの随筆や少女小説の執筆まで実に多岐にわたるのである。それが先に記した、

「教養」という概念のもと、広い文学的活動を要求された大正期の文学者の典型であることは言うまでもない。大正期の詩人のなかで春月ほど多彩な活動を展開し、文芸ジャーナリズムの潮流にのつたものはいないと言つてもよいだろう。そして今後検証されるべきであるのは、まさに大正文壇の寵児ちやうじとでも呼ぶべき春月の広範囲な文学活動の全容を知ることであり、それに付随する広い交友関係の調査であろう。一例を挙げるなら、大正五年の『虚無思想の研究』という著作に代表されるように、春月が社会主義・虚無主義といった思想に興味を示していたことが知られている。堺利彦・大杉栄・石川三四郎らとの交友関係は未だその全貌が明らかでない。感傷詩人春月、翻訳者春月とは異なる別の顔を春月は持つていたのであり、それらを総体として知ることが春月の真の魅力を理解するために不可欠である。最後に記す。生田春月を知るとはとりもなおさず大正文学そのものも知ることになるに他ならない。



『虚無思想の研究』（三徳社、大正11年刊）

人名解説

佐藤春夫（一八九二～一九六四） 詩人、小説家。和歌山県出身。慶応義塾大学在学中より文学活動を行う。小説『田園の憂鬱』、『小説永井荷風伝』などがある。

加藤武雄（一八八八～一九五六） 小説家。神奈川県出身。小学校教師を経て新潮社に入社。創作集『郷愁』、『悩ましき春』がある。

秦豊吉（一八九二～一九五六） 随筆家、翻訳家。東京都出身。会社勤務のかたわら翻訳や著述を行う。昭和八年には東京宝塚劇場に入社、シヨ、ミュージカルの経営に尽力した。

堺利彦（一八七〇～一九三三） 社会主義者、ジャーナリスト。福岡県出身。明治三十六年幸徳秋水とともに『平民新聞』を創刊。明治三十九年には日本社会党創立に参画した。

大杉栄（一八八五～一九二三） 評論家。社会運動家。香川県出身。明治三十九年頃より社会主義運動に関わり、大正元年、荒畑寒村とともに『近代思想』を創刊。

石川三四郎（一八七六～一九五六） アナーキスト。埼玉県出身。明治三十六年に平民社に参加、『平民新聞』などを執筆。昭和四年から九年にかけ『デイナミック』を刊行。著書に『虚無の靈光』、『西洋社会運動史』、『古事記神話の新研究』等がある。